

上方落語演題の意味的分類

A Semantic Categorization of the Kamigata *Rakugo* Stories

角 岡 賢 一
KADOOKA Ken-Ichi

ABSTRACT:

In this paper, 433 *Rakugo* stories are semantically categorized: stories based on Kabuki and Bunraku plays, ghost stories, heart-warming stories and funny stories. Funny stories are the most numerous, hence they will be subdivided into 19 subclasses. As well as these four semantic categories, types of punch lines —i.e. whether the punch line is a pun or not—is the second important criterion. When the categorizations of the semantic subtypes and the types of the punch line are combined, it would be more useful for further analyses.

KEYWORDS:

[上方落語] Kamigata *Rakugo* ・ [滑稽噺] funny stories ・ [芝居噺] stories based on plays
[人情噺] heart-warming stories ・ [怪談] ghost stories

1. はじめに

この小論は、上方落語演題を意味内容から分類する試みである。上方落語演題は、従来は「滑稽噺、芝居噺、人情噺、怪談¹⁾」の四分類に括ることが慣例であった。以下の節で各分類について検証していくが、滑稽噺以外を狭く定義していくと滑稽噺に分類される演題が圧倒的に多くなる。この小論においては各分類の定義を見直し、より細密な分析ができる下地を作る。この分類に基づいて、演者の語り口にどのような変化が見られるのかを追求するのが次段階での目標である。

落語全般が、滑稽噺に起源を有することは明らかである（例えば、興津（2004））。当初は短い小咄を連ねて口演したり、小咄集を出版したりしていた。その成立時期は十七世紀末から十八世紀初頭と考えられており、文楽や歌舞伎と重なる。上演形態からしても、落語は文楽や歌舞伎を簡略化した「一人芝居」であるとも言えよう。これ以降の考察においてはこのような通時的事情は勘案せず、現存する上方落語演題の分類を行う。また上方と江戸演題の差異や交流については、最終節で言及することとする。

米朝師（1978）は「上方芝居噺の本質」と題した一章（95～108ページ）で、芝居噺を次のように二分類している。

- (1) 甲類²: 芝居一幕を、そのまま高座で一人のはなし家が演じてみせるもの
「本能寺」「加賀見山」「瓢箪場」「綱七」「夜討蘇我」「兎雷也」等
乙類: 落語が単に途中から芝居がかりになってゆくのではなくて、はっきり、芝居の真似をしようという設定になる落語の場合
「昆布巻芝居」「蔵丁稚」「足あがり」「蛸芝居」「そってん芝居」「七段目」等

つまり甲類は狭い定義で、乙類は広義の「芝居噺」であると言えよう。米朝師(1978:83)では「芝居噺は大い、冒頭にその芝居のアラ筋を説明しておいてからとりかかるのである」と前置きがある。そして「それではこれから、一幕をご覧に入れます」とネタを振る。手拭いを幕に見立てて、幕を開ける所作が入る。続けて背景の説明などを交えながら、演者一人が複数の登場人物を演じ分けて噺を進める。つまり歌舞伎なり文楽を、そっくりそのまま落語に移して演者が一幕を再現するのである。それに対して乙類は日常の場面で登場人物の興が乗って突然、芝居がかってくるという趣向である。部分的に芝居の筋立てなどを採り入れているのみで、本筋は落語の滑稽噺である。例えば「蛸芝居」では、店の主人と蛸が争うという趣向でツケが入ったりして効果を高めている³。

また(1)に先立つ説明で、次のようにも述べている(同書、95~96ページ)。少し長くなるが、具体的に演目を例に挙げて定義しているのでそのまま引用する。

- (2) …「猫忠」(引用者註:「猫の忠信」)は上方では芝居ばなしの中には入れられていない。

つまり上方では、鳴物囃子のはいる落語はいくらでもあるので、ちょっと演出が芝居がかりになったぐらいでは芝居噺とは呼ばれないのである。「土橋万歳」などは後半はすっかり芝居がかりで、夏祭(引用者註:人形浄瑠璃や歌舞伎の「夏祭浪速鑑」)の儀平次殺しのパロディになっている。ツケがはいったりしていろいろの所作を見せるのだが、それでも芝居噺の中にははいていない。

「小倉船」なんか(東京でも「龍宮」と呼ばれて演じられている)、どう考えても芝居噺といってよいのだが、これも上方では芝居噺ではないのである。

つまり「芝居噺」について、本来の定義はごく狭義であったと言える。そもそも落語の起源には、人形浄瑠璃(文楽)や歌舞伎の要素があった。⁴一人で演じる落語は、ある意味でこれらの芝居を簡略化したものと言えよう。そういう意味では、落語の演目に芝居噺が大きな比重を占めるのも当然である。

このような芝居噺について米朝師(1978)は「上方落語のネタ帳を見ると、三十以上の芝居噺の演題が記されている」(同書、99ページ)とある。しかし、そのような演題の大半は創作者一代限りで途絶えてしまったものが多いようである。次節以降で取り纏める上方落語演目一覧(インターネットの「上方落語メモ」)では、(1)の甲類で挙げた演目の内「綱七」「夜討曾我」「兎雷也」「瓢箪場」は収録されていない。⁵これは、これら演目は直近数十年で口演された形跡に乏しいという事情を物語っている。その辺りの事情について、次のような説明がられる(同書99ページ)。

- (3) はなし家の子役は、踊りとこの芝居噺は必須科目で、みな何のことやらよく解らぬままに廻らぬ舌でセリフを言い、所作をしていたのであった。

そう言えば私の見た芝居噺は、皆この子役からの落語家ばかりであった。

昨今は幼少時から落語家になることは少なくなったであろうから、この面での芝居噺口演の実数は減っているであろう。無論それよりも大きな要因は、落語の聴衆を含めて一般に芝居を観る機会が減って馴染みがなくなったということを挙げるべきであろう。

芝居噺と同様、怪談も狭く定義すれば数はごく限られる。米朝師（2003：110～111）は「怪談 市川堤」マクラで、上方落語の怪談を次のように説明している。

- (4) …怪談噺は始めがどない変わろうと、ラストは必ずきまってまして、幽霊が出てきて恨みのセリフを言う。これも紋切り型のセリフ。…（中略）一番おしまいに幽霊に悩まされる方が「はて恐ろしい」と見得を切る。そうするとチョーンと柝が入る。「執念よなあー」とにらんだら、そいでしまいでんねん。もう筋がどない変わろうと「はて恐ろしい、執念じゃなあ」言うたら、そいでしまいですわ。

落語は起源上、サゲを付けて面白可笑しく一話を閉じる。しかし狭義の怪談は「サゲで落とさない」という点からして、このような落語の典型から外れている。また一話を通して、笑いを追求するよりも語りを聴かせるという側面を重視することも人情噺と共通している。

もう一点、上方落語の怪談で特徴的なことについて米朝師（2003）は「五光」の冒頭で次のように言及している。

- (5) 大体、この関西の落語には、本当の怪談噺というのはあんまりございませんな。東京の【牡丹燈籠】や【真景累ヶ淵】というような、ああいう凄味のある人情噺があったものというのあんまりないのでございます。大体、その怖い噺かいなと思ってる、後、阿呆みたいなことになるというのが、このこっちの落語の特徴でございまして。

これは、小咄においても同様の傾向が見て取れる。角岡（2012）で音響分析した小咄「ぼっぺん、ぼっぺん」「幽霊の穴」とKadooka（2012）の「鴨と葱」「油屋の猫」「書いたもんがもの言うた」の五編は、いずれも「五光」のマクラで振られたものである（これら音声は「ニコニコ動画」を参照した）。話の途中までは怪談じみているが、サゲでは一転して他愛もない荒唐無稽な展開になっているというのが共通点である。本編「五光」そのものも、「娘に懸想した修行僧によって娘が床離れできないような病に伏せる」という筋立てである。「結末がどうなるか」とハラハラしながら聴いていると、サゲは花札の役である五光が揃うという肩透かしに近い展開である。⁶

このような諸事情を考慮すると上方落語で真の意味で「怪談」と分類することができるのは「市川堤」など、ごく少数に限られる。大多数は、怪談めかした中に摺りを盛り込んだ滑稽噺である。以下の議論では、このような狭義の怪談から定義を広げて「怪談があった演題、狐狸妖怪の類が登場する噺」を括っていくものとする。

怪談は芝居噺の延長線上に位置づけることが可能であるとも言える。それは、一話の落語において結末で話し手以外の演者が幽霊に扮して登場するという演出が見られる（「市川堤」の採録で、米朝師（2003）の活字化には幽霊の登場や客席の反応は記されていない。インターネット上の「上方落語メモ」では、これについて詳細に註記がある）という一事をもってしても妥当であろう。

2. 演題の再分類

この節では、従来の基準とは異なった考え方で上方落語演題の分類を行う。対象とするのは、インターネット上の「上方落語メモ」(<http://homepage3.nifty.com/rakugo/>) に収録されている演目から、一定基準を経て選択された433編である。まず、選択するに当たって採用した基準について説明しておく。

まずは江戸時代から明治期・太平洋戦争終結までにかけて作られた、所謂「古典落語」は全編採用した。創作された時期は、一話に金高が登場すれば忽ちに明らかになる。即ち「両、分、朱、文」という単位であれば江戸期であるし、「円、銭、厘」という単位は明治期以降と知れる。例えば「代書屋」は四世米團治師によって創作されたのであるが、米朝師の回想によると太平洋戦争勃発直前の時期という。そのような時代背景故に「履歴書一枚を代書して、代金が三十銭」というような計算が登場してくる。時代的には、「古典」期でも最後期に相当する。そして太平洋戦争終結後に創作された部類を「新作落語」と扱う。本小論で対象としたのは新作落語のうち「善哉公社」や「動物園」のように新作であっても、何人もの噺家によって繰り返し口演されて半ば「古典化」している部類に限定する。そうでなければ定義上「新作落語」というのは日々創作されているし、演題によっては一度高座にかかるだけ、というものも多い。このような事情から「古典化された」数編を除いて新作落語の類は集計から除外する。

他方で全く新しく創作された噺であっても、古典落語に即した話題と様式を踏襲している場合は多い。例えば「狐芝居」である。本筋では「忠臣蔵」四段目、判官切腹の場をそのまま再現する拵えになっている。四段目に題材を採っているという点からは「蔵丁稚」に近いと考えられよう。また本筋に入る前も役者が街道を旅するという筋立てであるから大凡、新作とは想像しにくいほどである。落語作家の小佐田定雄氏による作であるが、こういう部類は「擬古典」と分類しても良からう。恣意的であるかもしれないが、現代生活を描いた純然たる「新作落語」と区別して一覧に加えている。

この節では、上方落語演題を「怪談、芝居噺、人情噺、滑稽噺」の四つに分類する。この四区分自体は、第一節での伝統的 분류を踏襲している。滑稽噺以外の三分類は新しい定義を施し、滑稽噺は細分化を試みる。対象とした433編で、四分類での内訳は以下の通りである。

(6) 怪談 61、芝居噺 25、人情噺 11、滑稽噺 336

このように、再定義を施しても圧倒的に滑稽噺が多い。四分類で比率を均衡させることが再定義の目的ではないとしても、余りにも偏っている。この論考は、今後のために分類を精密化することが目的であると再度強調しておく。

では以下で各分類を順次、採り上げていく。

2. 1. 怪談

第一節(5)で指摘されていたように、上方落語演題には生粋の「怪談」と言えるものは非常に限定される。上方では「落語というのは滑稽噺である」という意識が演者と聴衆に強く、笑いを主とする陽気な演題が好まれる傾向が影響しているように思われる。

第一節で「怪談があった演題、狐狸妖怪の類が登場する噺」というように定義を拡大した。このような基準で、「怪談」に分類される演題は六十一編という結果になった。以下にその内訳と演題を掲げる。

(7) 《怪談》六十一編

【考えオチ】(34) 蛇含草、胴切り、高倉狐、幽霊の辻、除夜の雪、稻荷俵、苦が鳥、茶漬幽霊、義眼、夢八、田之紀、写真の仇討、猫、化物つかい、さくらんぼ、ぞろぞろ、借家怪談、よもぎ餅、堪忍袋、もう半分、皿屋敷、源兵衛玉、応挙の幽霊、死ぬなら今、大黒亀屋、首提灯、貧乏神、質屋蔵、高尾、天狗裁き、骨つり、いもりの黒焼き、猫魔寺、死神

(8) 【地口オチ】(23) ふたなり、仔猫、五光、肝つぶし、狸の化寺、祝の壺、へっつい幽霊、算段の平兵衛、深山がくれ、ろくろ首、豆炭、誉田屋、吉野狐、産湯狐、真田山、片袖、鬼門風呂、けつね、雷の弁当、腕食い、木津川、福は内、雨乞源兵衛

(9) 【オチなし】(4) 宗悦殺し、雪の戸田川、天神山、市川堤

サゲ(オチ)がない四編は狭義の「怪談」に近い。「宗悦殺し」は「真景累ヶ淵」の発端で、三遊亭圓朝師の創作による。舞台も江戸のまま口演されている。「雪の戸田川」も江戸ネタで、元は歌舞伎「籠釣瓶花街酔醒」である。これが講釈『戸田の渡し・お紺殺し』になり、八代目林家正蔵師が落語に翻案したという。「市川堤」は、この話を米朝師が舞台を姫路に移したとしている。⁷これら三演題は純粹な意味での怪談であるから、サゲを必要としないのも当然であろう。「天神山」は長屋の住人である胴乱の安兵衛に狐が嫁入りして子を設けるという設定で、文楽「蘆屋道満大内鑑」(葛の葉の子別れ)を下敷きにしている。狐が子と別れる際に書き遺した「恋しくば訪ね来てみよ、南なる天神山の森の中まで」は、葛の葉の子別れ「恋しくば 尋ね来てみよ 和泉なる 信太の森の 恨み葛の葉」が本歌である(米朝師(1978:190))。落語では、この和歌で切る演出が多いであろう。サゲで笑いを誘う代わりに、親子の情を描いて余韻を残す効果がある。人情噺的な要素が濃いと言える。

考えオチに分類している「死ぬなら今」は、事前にサゲを予告しておくという一風変わった噺の運びをする。伊勢屋けち兵衛という名の悪徳商人、「冥土で閻魔大王に賄賂を渡して、極楽に通してもらおう。ついては、棺桶に百両の金を入れてくれるように」と頼んで世を去る。しかし息子が百両を偽金に差し替えたため、地獄でこれが流通してしまう。「これはけしからん」というので極楽から閻魔大王や赤鬼・青鬼を召し捕りに遣わされる。地獄に誰もいなくなったので、「死ぬなら今、…」というサゲである。予告しておかなくとも、特にわかりにくいサゲではなさそうである。前田(1966:303)では、このようにサゲを先に話しておく型を「逆さオ

チ」と分類している。風変わりな演題であるが、笑いは少ない。

仕草オチは、これでさげる演題が少ないので考えオチに含めている。「死神」では、この仕草オチが採用される場合がある。この噺、後半は「蠟燭が消えると、その人の寿命が尽きる」という筋立てになっている。主人公が自分の寿命蠟燭の前に連れて行かれ、サゲで蠟燭が消えた時がっくりと崩れ落ちる仕草で寿命が尽きたことを表す。「ニコニコ動画」で六代目三遊亭圓生師は、この仕草オチを採用していた。

2. 2. 芝居噺

次に、芝居噺の分類を試みる。以下の分析では（1）における乙類の定義よりもさらに一段、拡充する。即ち歌舞伎と人形浄瑠璃から採った題材は全てこの範疇に加えるのみならず、「くっしゃみ講釈」のように講釈や人形絡繰りを取り入れた演題までを含める。また「蛸芝居」のように特定の芝居から趣向を借りた中身でなくとも、ツケが入ったりして芝居があった演出を施されている演題もこの範疇に分類する。そうすると、芝居噺に分類されるのは次の二十五編である。

(10) 《芝居噺》二十五編

【考えオチ】(10) 足上り、舟弁慶、寝床、蔵丁稚、胴乱の幸助、淀五郎、くっしゃみ講釈、狐芝居、居候講釈、そってん芝居

【地口オチ】(14) 猫の忠信、桜の宮、蛸芝居、軒づけ、景清、本能寺、七段目、芝居風呂、昆布巻芝居、豊竹屋、質屋芝居、浄瑠璃息子、狼講釈、土橋万歳

【オチなし】(1) 加賀見山

「オチなし」と分類した「加賀見山」は、人形浄瑠璃から歌舞伎にも翻案された「^{かがみ山}加賀見山旧錦絵」をそっくりそのまま再現する芝居噺である。この演題は、第一節（1）でも米朝師によって純然たる芝居噺と定義されていた。「上方落語メモ」では、岩藤の局が花道を退場していくという場面で切られている。しかし同様に純然たる芝居噺と分類されている「本能寺」では、最前列で見物していた老婆が孫への土産に持ってきた蝗が舞台上で跳梁跋扈し、「なんでこないぎょうさん、蝗が出てきたんやろ」「ああ、おおかた前のお客が、青田らしいわい」⁸というサゲが付いている。このサゲが付いたことによって、本筋の森蘭丸最期については結末が語られないままになってしまう。これは忠実に芝居の筋立てをなぞるよりは、落とし噺としてサゲを付けることを優先した結果であろう。

(10) に挙げた芝居噺二十五演題の内、「仮名手本忠臣蔵」に題材を採ったものが五話である。「蔵丁稚」「淀五郎」「狐芝居」「軒づけ」「七段目」である。「軒づけ」は「忠臣蔵」以外にも「鎌倉三代記」や「生写朝顔日記」など、文案の人気狂言が一節ずつ取り込まれている。他の四演目は、「忠臣蔵」から一段をほぼそのまま再現するような筋立てである。特に「蔵丁稚」「淀五郎」「狐芝居」は四段目、判官切腹の場に焦点を当てている。いかにこの場が「忠臣蔵」前半の山場であるかという証左であろう。

文案の時代物で三大人気狂言と言えば「仮名手本忠臣蔵」「義経千本桜」「菅原伝授手習鑑」

である。それぞれ江戸時代・平安時代末期・平安時代初期の史実から着想を得ている。「忠臣蔵」演題が上述のように五、「千本桜」に関連しているのは「舟弁慶」⁹と「猫の忠信」である。「菅原伝授手習鑑」に関連する演題は「軒付け」で松王丸の出が数行語られる程度で、纏まって題材が採られている噺は見当たらない。

2. 3. 人情噺

江戸落語には「芝浜」「文七元結」のように、固有の人情噺がある。しかし笑いを追求する傾向が強い上方の演題では、そのような人情噺というのはごく少ない。新分類においても、次の十一編に留まる。

(11) 《人情噺》十一編

【考えオチ】(4) 二十四孝、厩火事、ざこ八、箒屋娘

【地口オチ】(3) 蜆売り、子は鏝、弱法師

【オチなし】(4) 幸助餅、南京屋政談、鬼あざみ、八五郎出世

(11) で「考えオチ」と分類している「箒屋娘」は米朝師 (1991: 258~259) によって補足されたサゲによる。「上方落語メモ」は二代目桂小南師による口演を採録しているが、そこでは末尾「箒屋娘」というお目出度いお話しで御座います」とサゲなしで切っている。

「子は鏝」は「初代春風亭柳枝の創作になる」と出典が明示されている (ウィキペディア) ので、純然たる江戸ネタと断定して良さそうである。「子別れ」として三部作になっており、「子は鏝」は中編の後半から第三部にかけてを指すという。父親が身を持ち崩していたので別居していた母子が、最後に繕りを戻すという筋書きになっている。「昔から言う言わ。【子は鏝】ちゅうけど、ホンマやなあ」(父親)「え、お父っつあん、わい鏝か、、それでお母はんきのう、玄能でどつことしたんや」(子の亀吉) というサゲはおそらく、当初から付けられていたものであろう。秀逸なサゲである。

「厩火事」は対照的に「上方ネタ」と説明が加えられている (ウィキペディア)。上方で高座にかかることが少なくなっているというのは、夫婦の情愛をしんみりと描いている反面で笑いが少ないという辺りの事情を反映しているのかもしれない。

「弱法師」は別名「菜刀ながたん息子」とも呼ばれる。「弱法師」は大元が謡曲 (能) であり、文楽・歌舞伎の「摂州合邦辻」に大筋が採り入れられている。落語においては「包丁の注文を取り違えたというだけで一人息子を勘当したが故に息子が出奔し、一年余りも行く方知れずで身を案じていたのが、春の彼岸に四天王寺で物乞いに身を賣した息子と二親が再会する」というように翻案されている。このように理不尽な筋立てでありながら、サゲは「長々思うて難渋致しております」とかけた「菜刀ながたん詠えて難渋致しております」という地口である。サゲ直前まで笑いを抑えて涙を誘うような人情噺でありながら、呆気ない地口でさげられてしまう。地口そのものはよく練られているが、こういう水と油のような取り合わせは笑いを追求する落語の宿命であろうか。

サゲのない四話は、それ故に人情噺としての特色を良く出していると考えられる。サゲを付けると、どうしても滑稽噺のようになってしまう。「八五郎出世」では、長屋の娘が大名の側

室になってお世継ぎの男子を産むという喜ばしい筋書きになっている。武藤（2007：417）では八五郎が武士に取り立てられ、馬上で困惑するのがサゲであると説明が加えられている（別名「妾馬」の解説として）。逆に「鬼あざみ」は実母に早く先立たれた清吉が身を持ち崩していくという悲運の一話である。両方とも途中で切る際には、「八五郎出世（鬼あざみ）の一席で御座います」というように終える。このように人情噺には、悲喜交々という側面が見られる。

2. 4. 滑稽噺

以上のように芝居噺・怪談・人情噺という三範疇は、合計しても九十七話にしかならない。滑稽噺だけで336演題と集計しているので、その三分の一という少なさである。このように上方落語の演題においては、必然的に滑稽噺の占める比重が非常に大きい。江戸落語では、本論考で作成・使用したような演目一覧は管見の及ぶ限りで見当たらなかったため（武藤（2007）は三百題収録の事典であるが、江戸ネタの代表的な演題を中心として抄録したものである）、詳細な比較は難しい。しかし例えば怪談の「牡丹燈籠」だけでも続き読みで何週間もかかるような大作であるし、人情噺においても「芝浜」や「文七元結」のような固有な演題もあるので、相対的に滑稽噺の比重は小さいのではないと思われる。

以下では滑稽噺を十九の範疇に下位分類した。便宜的にそれら下位範疇を括るのに日常に密着した部類と、そうでないものに二分してみる。前者は日常生活そのものや、その基盤となる生業で成り立っている。後者は、旅に出るといような非日常の世界や道楽など遊びの部分である。後者に含めた「講釈」は、講談から移したネタを指す。落語と異なり講談（講釈）は歴史上の人物が主体であり、演者が前面に出て語るという形態を採っている。また「小咄」という範疇は内容でなく形式に着目した分であるが便宜上、後者に区分した。前者は九、後者は十の区分になった。

- (12) 【生業】 165 商い 52、金銭 7、詐欺 17、盗人 17、長屋 35、武士 8、相撲 6、根問
い 8、仏教 15
【道楽】 171 色恋 30、廓 14、茶屋 19、酒 20、旅 30、病 20、裁き 7、動物 10、講
釈 12、小咄 9

結果として、例えば詐欺や盗人、仏教という範疇が日常性という共通点によって「生業」という下に括られるようになった。かように、この二分法は便宜的なものである。

では以下で、上方落語滑稽噺の下位分類を試みる。

2. 4. 1. 生業

ここでは広い意味での「生活」を成り立たせている、職業や暮らしに根ざした演題を下位分類していく。

まずは、大坂らしく商家に関連する演題を「商い」と括った。中心は船場の大店で、手代や丁稚という奉公人が十人以上というような店を想像する。言うまでもなく以下ではそのような大店ばかりではなく、たった一人で営むような小商売も題材となっている。この範疇には次の

五十二編が含まれる。これは、全ての小区分でも最も多い。

(13) 《商い》五十二編

【考えオチ】(34) はてなの茶碗、うなぎ屋、古手買、しの字丁稚、いらち丁稚、平林、豆屋、鬼の面、商売根問、片棒、代書、船徳、ねずみ穴、猫の皿、提灯屋、開帳雪隠、裏向丁稚、中元丁稚、金釣り、米揚げ箆、口入屋、千両みかん、百年目、京の茶漬け、手水廻し、貝野村、有馬小便、月並み丁稚、鍋墨大根、道具屋、井戸の茶碗、河豚鍋、善哉公社、あくびの稽古

【地口オチ】(15) 抜け雀、隣の桜、孝行糖、正月丁稚、地上げ、近江屋丁稚、金明竹、浮かれの屑選り、壺算、天狗さし、厄払い、いらち俵、住吉駕籠、江戸荒物、稽古屋

【オチなし】(3) 鑄掛け屋、藪入り、帰り俵

この範疇では商家を舞台にした演題が中心であるが、「稽古屋」や「あくびの稽古」など稽古屋もの、「善哉公社」のように新作も加えた。商家を舞台にした演題は、「百年目」に代表される旦那衆が中心になる大ネタと、丁稚が主役の比較的演じやすいものに下位分類することも可能であろう。丁稚が主役となっているのは「古手買」(後半)「しの字丁稚」「いらち丁稚」「平林」「裏向丁稚」「中元丁稚」「月並み丁稚」「正月丁稚」「近江屋丁稚」「藪入り」と多い。他方で大店の旦那を演じるとなると、演者にも貫禄が必要である。大人が子どもの真似をするのは容易であるが、逆は難しいからである。

ここで「オチなし」と分類している三演題のうち「鑄掛け屋」は「山上詣り」という噺の前半で、「山上詣り」にはサゲがあった(ウイキペディア)。「藪入り」は丁稚奉公に出た亀吉が初めて家に帰ってくるという筋である。人情噺が掛かっているせいで、オチがなくともさげられるのかもしれない。

「手水廻し」は「貝野村」の後半が独立した噺である。貝野村は丹波国という設定になっているが、ここでは手洗いのために「手水を廻す」というのが通じない。宿の使用人がお寺に尋ねに行き、「それは長い頭のこと」と間違ったことを教えられる。

「商い」に大きく関連するのが「金銭」である。しかしこの類は七編と意外に少ない。「始末の極意」は親指と人差し指で円を作って金銭を示す仕草オチ、「掛け取り」にはサゲがない。他の五編は全て考えオチである。仕草を考えオチに含めるとすれば、専ら金銭に特化する演題では圧倒的に考えオチが多いと言える。

(14) 《金銭》七編

欲の熊鷹、高津の富、鷲とり、持参金、強情(以上、考えオチ)、始末の極意(仕草オチ)、掛け取り(オチなし)

「高津の富」は高津神社が肝煎りとなった富籤を巡る騒動記である。「掛け取り」は大晦日の節季に借金取りが来るのを、相手の道楽に誘導して撃退しようという筋立てである。芝居の好きな相手には芝居仕立て、相撲が好きな相手には相撲ネタ、喧嘩っ早い相手には喧嘩腰で突っか

かろうという趣向で運ぶ。借金取り一人当たり四分なり五分という計算で、人数を増減させることも可能である。それによって、全体を短くも長くもできるという利点がある。その分、全体のサゲはなしという形になるのはやむを得まい。

商売に絡む場合もあるが、他人を欺して利を得るといふ噺も落語に多く見られる。これらを「詐欺ネタ」と括った。「鉄砲勇助」は「嘘つき村」とも異名を取り、口から出任せで他人をからかって喜ぶような趣向である。このような法螺吹き噺もここに含めた。「狸の賽」と「看板の一^ひ」は博打ネタであるが、二つながら他人を欺すという共通点もあったのでここで扱う。「詐欺ネタ」には十七編が該当した。

(15) 《詐欺》十七編

【考えオチ】(13) 時うどん、牛の丸薬、饅頭こわい、二人ぐせ、ちりとてちん、秘伝書、松医者、星野屋、鰻の軒間、御神酒徳利、近眼の煮売屋、狸の賽、看板の一

【地口オチ】阿弥陀池

【オチなし】(3) 昆陽の御池、鉄砲勇助、無い物買い

これら十七編のうち「時うどん」(饅頭屋)「牛の丸薬」(薬屋)「近眼の煮売屋」(煮売り屋)「無い物買い」(諸商売)の四編は商売絡みである。

強引に言えば「商い」の一種とも考えられる盗人ものも詐欺と同じように犯罪行為を描いていながら、落語に登場する輩はどことなく憎めないように人物造形が施してある。以下の十七編を抽出した。

(16) 《盗人》十七編

【考えオチ】(11) 水屋の富、一文笛、おごろもち盗人、眼鏡屋盗人、打銅盗人、お血脈、花色木綿、崇禅寺馬場、子盗人、芋俵、書割盗人

【地口オチ】(6) へつつい盗人、仏師屋盗人、月に群雲、転宅、警察うどん、盗人の仲裁

「一文笛」は米朝師の創作である。「噺家が素で語る地を減らし、対話で筋を進める」という考えに基づいて作られた掏摸の話である。目論見通り、本題に入ってから登場人物による対話だけで語られる。「月に群雲」も新作で、これは落語作家である小佐田定雄氏の手になる。笑福亭松喬師門下の三番師によって演じられている。三番師は、このネタを始めとして盗人ものを得意とし「盗人三番」と異名を取っている。

大店の旦那衆が中心となる商家の噺と異なり、つつましい庶民の暮らしを活写しているのが長屋を舞台とした噺である。落語が庶民の娯楽であるという側面を反映して、以下では三十五編と多くの噺がこれに含まれる。

(17) 《長屋》三十五編

【考えオチ】(22) 延陽伯、初天神、桃太郎、子ほめ、青菜、近日息子、遺言、長短、四人ぐせ、笠碁、貧乏花見、つる、宿替え、田楽喰い、人形買い、

黄金の大黒、向う付け、尻餅、喧嘩長屋、町内の若衆、茶の湯、粗忽長屋

【地口オチ】(8) 不動坊、日和違い、時の氏神、天災、千早振る、加賀の千代、十徳、平の影

【オチなし】(5) くやみ、祝いのし、借家借り、浮世床、嬾違い

長屋の住人で、二人一組で登場すると言えば喜六と清八である。喜六が、ちょっと頼りなく見当外れな言動で狂言回しという役所である。対して清八は常識人で、常に喜六を窘める。この二人に加えて三人一組となる場合は、源兵衛が加わる。

このように同年配の二人または三人が一組で登場する場合は、区別する必要もあることから名前が付いているのであろう。それに対して長屋に暮らす親と子、夫婦というように話しぶりで区別できる場合は、登場人物に名前が付いていないことが多い。「初天神」の夫婦(子は「寅ちゃん」という名が付いている)、延陽伯の主人公(花嫁となる延陽伯の相手)、「宿替え」に登場する夫婦など、名前の出てこない人物は枚挙に遑がない。例外は、「近日息子」の作次郎であろうか。「作次郎」という名は、大店の若旦那でお茶屋遊びに耽る人物にも充てられる。「近日息子」では長屋に父親と二人で暮らす息子の名としてあるが、これはこの息子に「抜け作、不作」という渾名を持ち出すために用いられているとも言える。

大坂は商人の街、京は王城の地であったから上方落語には武士が登場する噺は比較的少ない。また大坂冬の陣と夏の陣で「豊臣方が関東勢に滅ぼされた」という意識から、武士に対する一種の敵対感情も色濃く残っていたものと推測される。江戸落語においても「岸柳島」のように権勢を振るう武士を揶揄した噺が伝えられているが、上方落語には武家ネタそのものが少ないと言える。時代的にも明治期以後に創作された演題には武士は登場しないので、その面でも影響はあろう。演題一覧では、次の八編を「武家物」と分類した。

(18) 《武家》八編

【考えオチ】(4) 大名将棋、須磨の浦風、宿屋仇、試し切り

【地口オチ】(2) 焼き塩、瘦瓶の花活け

【オチなし】(2) 碁盤截、荒大名の茶の湯

「宿屋仇」は伝統的に旅ネタに分類されるが、ここでは一方の主人公である明石藩の万事世話九郎と称した武士を重く見て、ここに分類した。「碁盤截」は江戸ネタでは「柳田格之進」と称され、元来は講談噺である。「荒大名の茶の湯」も元は講釈ネタで、加藤肥後守清正、福島左衛門大夫正則など豊臣方七奉行が登場するなど、通常の落語ネタとは異なる構成である。この二演題にはサゲがない。「焼き塩」は、武士であるにも拘わらず無筆であるが故の悲喜劇を語っている。

娯楽の少ない時代、相撲が唯一という位の競技興行のものであった。旅ネタ「宿屋の仇」にも、相撲の話題に力が入りすぎて布団の上で相撲を取り出す場面が盛り込まれている。しかしその割りには相撲ネタは少なく、以下の六演題のみであった。

(19) 《相撲》六編

【考えオチ】(3) 半分垢、歟濁、相撲場風景

【地口オチ】(3) 花筏、大安売、佐野山

全体数は少ないが、考えオチと地口オチが同数という割合であった。高座にかかる頻度では、「相撲場風景」と「花筏」が双壁であろう。次に「歟濁」で、残る三演題は滅多に実演される機会はないものと思われる。これは、大相撲人気と関連しているのかもしれない。

最後に仏教に関連した演題について述べる。釈師(2010)は副題にある通り、落語と仏教(浄土真宗)の関連について考察している。49ページから56ページにかけて、仏教の各宗派別に関連する落語演題を列挙してある。また78ページから84ページでは浄土真宗に根ざした演題七編について解説を加えている。以下は、十五編が対象である。

(20) 《仏教》十五編

【考えオチ】(7) 寿限無、茶漬えんま、淀川、不精の代参、指南書、八五郎坊主、餅屋問答

【地口オチ】(6) お文さん、大仏の目、鳥屋坊主、亀佐、天王寺詣り、ぬの字鼠

【オチなし】(2) 宗論、世帯念仏

「茶漬えんま」は小佐田定雄氏原作による新作、「宗論」と共に仏教以外の宗教も登場する。「餅屋問答」は江戸では「菟菟問答」という名で禅宗の問答を題材に採っている。サゲは、大和尚に扮した餅屋の「あかんべー」という仕草を永平寺の修行僧が「和尚の目の下にあり」と勝手に解釈して退散してしまうという勘違い噺に仕立ててある。「ぬの字鼠」は、涙で描いた鼠が本物となって縛ってある縄を食い切ってくれたという雪舟等楊の故事を踏まえているようである。「お文さん」とは本願寺八世蓮如上人の私信を真宗大谷派で「お文」(本願寺派では「御文章」と称するのを演題にしている。

釈師(2010)でも指摘されている通り、仏教の説教と落語とは関係が深い。特に浄土真宗系における節談説教では、「地口調」「棒引き口調」「くらい引き口調」「力み口調」「いばり口調」「ノリ口調」など多様な語り口が紹介されている(同書、72～73ページ)。これらを落語における語りと比較するのも、今後における課題の一つである。

2. 4. 2. 道楽

「生業」が暮らしに根ざした側面を括る範疇であるとすれば、対極にあるのは「道楽」であろう。「道楽」には暮らしを豊かにするという一面もあれば、行きすぎた道楽は身を滅ぼすことにも繋がる。

この範疇では、まず色恋に関連した演題を集計してみる。ここには「立切れ線香」や「崇徳院」のような純情編から「鼠の耳」「粉つき屋」「女護ヶ島」のような、詳細を紹介することが憚られるような部類まで幅が広い。

(21) 《色恋》三十編

【考えオチ】(19) 二階借り、短命、風呂敷、湯屋番、紙入れ、手切れ丁稚、包丁間

男、近所付合い、殿集め、後家殺し、人形の目、大名道具、目薬、
粉つぎ屋、鼠の耳、植木屋娘、口合小町、愔愔の独楽、立切れ線香
【地口オチ】(10) 後家馬子、宇治の柴舟、金瓶梅、堀越村、尼恋、トンボさし、禍は
下、崇徳院、お玉牛、猿後家

【オチなし】(1) 女護ヶ島

この部類に限っては、考えオチよりも地口の方が多い。「女護ヶ島」は、「どこまで語ってもき
りがない」というような態にして話を切っている。

「立切れ線香」は、上方落語随一と言えるほどの純愛物語である。船場大家の若旦那がお茶
屋の娘である芸妓・小糸と馴染みになるという筋立ては、お茶屋断に分類することも可能であ
ろう。ここでは、若旦那と小糸の純愛に着目して色恋断に加えておく。若旦那のお茶屋通いが
過ぎて百日間、蔵に幽閉される。その間に小糸は若旦那と連絡も取れないことを気に病み、幽
閉八十日目まで命を落とす。幽閉が解かれた百日目は小糸の二十一日目の法事、駆けつけた若
旦那が仏壇で事情を聞かされて線香を上げていると三味線が勝手に鳴り出す。やがてその音が止
まったので「なんで途中で止まったんや」「お仏壇の線香が、ちょうどたちきりました」—芸
妓の花代を「線香代」とも称することにかけて、「線香が立ちきった、即ち、遊興の終わり」
というサゲにしている。「弱法師」のサゲとは異なり、余韻を残しながら見事に落としている。
恋煩いで落命するという筋立ては不条理でもあるが、秀逸な演題である。米朝師(2002:8)
では「数百を数え得る上方落語中でも屈指の大ネタで、これは古来、偶像視されてきたはなし
です。…(中略)…サゲがまた上々であること、さらにその狙いが人間の心情に根ざした、落
語には珍しい純愛物語であること」と評している。

もう一編の純情もの「崇徳院」は大店の若旦那が、高津神社へ参詣した帰り道に同じく大店
の育ちらしい娘に一目惚れして恋煩いに落ちるといふ筋書きである。娘が若旦那に書いて渡し
た崇徳院の「瀬をはやみ 岩にせかる 滝川の」という上の句が全編を通じて鍵となり、下
の句「割れても末に 会わんとぞ思う」とかけて床屋の鏡が割れたことを「割れても末に 買
わんとぞ思う」といふ地口に仕立ててある。

色恋の断と関係が深いのが廓断である。¹⁰上方落語における廓断は、江戸ネタに比べて少な
いと考えられる。その考証は、別の機会に譲りたい。上方ネタとしては、以下の十四編を挙げ
ておく。

(22) 《廓》十四編

【考えオチ】(8) 付き馬、三枚起請、坊主の遊び、明烏、三人兄弟、唐人お吉、松島
心中、吹替息子

【地口オチ】(5) 狸茶屋、幾代餅、棟梁の遊び、錦の袷裳、でば吉

【サゲなし】(1) 艶断初天神

「幾代餅」は同名の餅が江戸・両国で売られていたことから ([gogen.bokkurigoya.com/
archive/005894.php](http://gogen.bokkurigoya.com/archive/005894.php))、江戸ネタと考えるのが妥当であろう。そうすると「吉原の幾代太夫が
餅屋に嫁いできた」というのは実話であろうか。「上方落語メモ」では大坂の新町遊郭に場所
を移した録音を起こし、「うちは幾代餅、焼き餅はございません」といふサゲを付けている。

古今亭志ん朝師による口演（インターネット上の「ユーチューブ」）では、そのようなサゲはない。サゲのない型が原形に近いのではないと思われる。

「棟梁の遊び」は江戸落語で「突き落とし」に相当する。両方とも、遊郭での遊興費を踏み倒すという筋立てである。特に「艶噺」という演題が付けられている「艶噺初天神」は、俵を一月二十五日の初天神に連れて行く「初天神」に廓通いなどの攪りが付け加えられているという事情から、別の演目として独立させている。

遊郭と縁が深く、商家の大旦那や若旦那が通い詰めるという点で「お茶屋噺」という範疇も上方落語には欠かせない存在である。上述の「立ち切線香」にも、典型的にお茶屋噺の趣向が盛り込まれている。お茶屋遊びは、芸妓にしても一人だけではなく二人以上で三味線や太鼓が入り、幫間（太鼓持ち）が加わったりもする。それだけに、一回当たりの散財も大きい。これが度重なると、大店の身代と雖も安泰ではない。そこで旦那衆の遊興を番頭が諫めたりする。このような駆け引きが、お茶屋噺の聞き所でもある。上方噺では商都であるという事情を反映しているからであろう、お茶屋噺が多いことに反比例して廓噺が少ないのかもしれない。演題一覧から抽出したお茶屋噺は、以下の十九編である。

(23) 《お茶屋》十九編

【考えオチ】(13) 菊江仏壇、愛宕山、親子茶屋、けんげしゃ茶屋、鯉船、冬の遊び、電話の散財、苺の火、辻占茶屋、茶屋迎え、死人茶屋、うらのうら、茶目八

【地口オチ】(6) ほうじの茶、遊山船、坊主茶屋、釜猫、大丸屋騒動、太鼓腹

お茶屋噺は、ある意味で最も上方落語の特質を体現していると考えられる。普段は儉約しながら、「使う時は思い切って使う」という商家の気風をよく表している。特に、社交的な付き合いでは「儉約は以ての外」という考えていたようである。しかしお茶屋通いが道楽になると、大店と雖も屋台骨を揺るがすことになってしまう。上掲の十九編では、全てオチが付いているというのも上方噺らしい。

「けんげしゃ」というのは「縁起を担ぐ者」という意であるが、もはや廃れた語である。上方落語でもこの演題にだけ残っているという古風な言葉である。大晦日から元旦にかけて、という正月ネタでもある。冒頭に主役が「村上の旦那さん」と名指しされるが、このように登場人物に名前が付いている噺も珍しい。この村上の旦那さんは、年格好からして隠居していても当然という設定である。そうでありながら、ミナミで国鶴という芸妓を鼎脰にして店を一軒構えさせる。国鶴の両親がけんげしゃであることを肴にして、村上の旦那さんは縁起の悪いことを殊更に言い立てて楽しむという趣向で攪りどころが盛り沢山の噺に仕上がっている。

題名と裏腹に、「冬の遊び」は暑い盛りの新町が舞台である。堂島の相場師、「直(じき)」と呼ばれる旦那衆が主人公である。この直衆が新町の太夫道中に案内がなかったことに意趣返しをしようとして、お茶屋の仲居を困らせるというのが前半。後半は道中を途中で抜け出してきた太夫に義理立てをして、直一同が暑い最中を真冬に見立てて遊ぶという趣向から「冬の遊び」という外題が付いている。この遊びに無理矢理に付き合わされた幫間が暑さに堪らず、井戸端で頭から水を浴びる。「何じゃい、その真似は」「へえ、寒行の真似をしとおります」……体面を重んじる船場の直気質を伝え、サゲも秀逸である。

米朝師（1978：217～221）は、「釜猫」について詳しく解説を施してある。お茶屋遊びが過ぎた若旦那が、例によって親旦那に幽閉されるというのが発端である。一計を案じて、大釜に隠れて脱出を図ろうとしたところを親旦那に計略を覚られる。親旦那は、息子の代わりに腹を下した猫をお茶屋に送り込むことにするが、この猫が座敷で粗相をするという馬鹿馬鹿しい筋立てである。

米朝師（2005：61～63）は「大丸屋騒動」について大略、次のように述べている。この噺は先代の桂枝太郎という人が、次男坊の宗三郎が人を次々に斬っていく演技に余人の及ばない演出を加えたので、他に誰も演じられないようになってしまった。長兄が伏見に住んでいたが、宗三郎がいくら斬り付けても血も出ない。「斬っても斬れん、不死身の兄でございます」という地口でさげる。宗三郎が祇園で次々に人を次々に斬っていくという山場が陰惨であるだけでなく、その修羅場に似つかわしくない地口でさげられるという二重の理由によってこの演題は高座にかけられる機会が減っているであろう。

噺家に弟子入りして修行を始めてまず、「口上」を習う。見台という台を前に置いて右手に「叩き」とも呼ばれる張り扇、左手には小拍子を持って交互に賑やかに鳴らしながら「ようよう上がりました私が初席一番叟でございまして、お後続きますのが二番叟に三番叟、四番叟に五番叟、ご番僧にお住持…」と喋り始めるのが高座の幕開けである。途中から「さて宵の口のお噺はと申しますと、船ようか旅ようのお噺と決まっております…」と旅ネタに振ってくる。順当に続けば、「東の旅 伊勢参宮神之賑」発端へと繋がる。口上の中でも紹介されているように、上方落語において旅ネタは一大範疇であると言える。「東の旅は伊勢参宮神之賑、西の旅は兵庫の渡海鱒の身入れ、北の旅は池田の猪買い、南の旅は紀州飛脚…」と列挙していく。では旅ネタ三十編を分類してみよう。

(24) 《旅》三十編

【考えオチ】(16) ところろん、瘤弁慶、池田の猪買い、いらちの愛宕詣、地獄八景亡者戯、兵庫船、七度狐、矢橋船、百人坊主、堺飛脚、紀州飛脚、うんつく酒、三人旅浮之尼買、茗荷宿、鯉津栄之助

【地口オチ】(11) 野崎参り、軽業、小倉船、三十石、近江八景、軽業講釈、雁風呂、軽石尻、西の旅・舞子、西の旅・須磨、月宮殿・星の都、常太夫義太夫

【サゲなし】(3) 東の旅発端、宿屋町、西の旅・明石

旅ネタと括られる中でも「東の旅 伊勢参宮神之賑」は、十編以上の連作になっている点だけでも突出している。喜六と清八の二人連れが伊勢参りをする道中を連作に仕立ててある。上掲(24)の演題を出立から帰着まで順に並べてみると「発端—煮売り屋—七度狐—鯉津栄之助—うんつく酒—常太夫義太夫—軽業—軽業講釈—三人旅浮之尼買—軽石尻—矢橋船—宿屋町—瘤弁慶—三十石」という具合になる。続き物であるが故に「発端」や「煮売り屋」のように固有のサゲがなく、切ってしまうネタがある。逆に「七度狐」で「ずぼっと狐の尾を抜いたと思たら、畑の大根を抜いとりました」というように、噺の運びに見合うサゲを付けることもある。高座にかかる頻度が高いのは前半「発端—煮売り屋—七度狐」と後半「矢橋船」以降「三十石」までである。つまり中間「鯉津栄之助」から「軽石尻」までは比較的、

馴染みがないネタである。

風変わりな場所への旅としては「地獄八景亡者戯」「月宮殿・星の都」「小倉船」が挙げられよう。「地獄八景亡者戯」は地獄を一大歓楽地として多様な登場人物が巡る噺で、一時間を越すという大ネタである。サゲは「大王を呑んで下してしまう」という地口で、漢方薬の下剤である大黄と閻魔大王の大王をかけてある。「月宮殿・星の都」は龍の背中に乗って天に昇るといふ、これまた奇想天外な噺である。「小倉船」は別名を「龍宮界・龍の都」と称し、ギヤマン（硝子）のフラスコに入って海底に潜る。「ひょっとして実行できるかもしれない」という辺りで奇想天外さは前二作に劣ると言えるかもしれない。

上述のように見台で叩きと小拍子を賑やかに鳴らしながら噺をするのは、大道芸から起こった上方落語の名残であると言われている。「口上」が旅ネタと結びついているのも、こういう事情が絡んでいるのかもしれない。江戸落語には、このように体系的な旅ネタの系列というのとはなさそうである。

俗に「三大煩惱」と括られる中で、落語演題において大きな比重を占めている酒に関するネタを纏めてみる。酔態を描くのは、「現世肯定の芸」（米朝師（2005：224））である落語にとって得意な場面と言えよう。総数は二十編である。

(25) 《酒》二十編

【考えオチ】(14) 酒の粕、蝦蟇の油、ひとり酒盛、親子酒、二番煎じ、替わり目、馬の尾、猫の災難、試し酒、徳兵衛炬燵、禁酒関所、三年酒、市助酒、うらみ酒

【地口オチ】(3) 堀川、らくだ、鶴満寺

【サゲなし】(3) 寄合酒、上爛屋、三人上戸

サゲなしと区分している三編はいずれも後半で別の話題に転じる噺が、酒を飲む場面（または「寄合酒」のように、その準備をする場面）で独立していると考えられる演題である。「寄合酒」は「うん尽くし（田楽食い）」の前半であり、「上爛屋」は「首提灯」と続いていく。「三人上戸」も酔態を描き、口演時間に応じて適当な箇所ですることが出来るように作っているのであろう。

地口オチに分類している「らくだ」は、千日前の火屋（焼き場）で間違えて焼かれようとした酔っ払いの願入坊主が「ここはどこや」と尋ねて「千日前の火屋や」「冷やでもええから、もう一杯」というサゲになっている。ここまで演じると長くなるというので、紙屑屋が酔った場面で切ることも多い。

三大煩惱のうち「博打」は意外に少ない。博打固有の噺としては「狸の賽」と「看板の一」があるが、「詐欺」という分類に含めた。

悪い意味での「非日常」として、病気や医者を扱った噺をここに纏める。医術の発達しなかった時代においては、頼りない医者でもあてにせざるを得ないという状況があったのであろう。二十編を以下で挙げておく。

(26) 《病》二十編

【考えオチ】(11) 風邪うどん、卯の日参り、強情灸、疝気の虫、首の仕替え、地藏の

散髪、寿命、金玉医者、癩の合葉、滑稽清水、代脈

【地口オチ】(9) 夏の医者、転失気、辛子医者、口合あんま、覗き医者、ドクトル、ちしゃ医者、風の神送り、上方見物

ここでは純粋な意味の病気だけではなく、「男前になりたいが為に首をすげ替える」という「首の仕替え」のような類まで含まれている。また「上方見物」は、どこの方言ともつかない怪しげな言葉——「江戸荒物」で登場する、横町の長谷川で奉公する女子衆のような言葉遣いと同様であり、このように故意に何処にも実在しない言い方を拵えたものであろう——がサゲに直結するのであるが、前半で上方見物をする段で伏線が張られている。

裁判にまで至った係争事を扱ったような噺は、やはり非日常と分類すべきであろう。時代が江戸期に限られるというのは武家ネタと同様である。ここで採り上げるのも以下の七編と少ない。

(27) 《裁き》七編

【考えオチ】(3) 次の御用日、佐々木裁き、五貫裁き

【地口オチ】(4) 帯久、鹿政談、テレスコ、さじ加減

落語という作り事の中にせよ、裁判沙汰になるという事態そのものが重苦しいのであろう。「帯久」でのように善人である和泉屋と兵衛が妻子に先立たれたり火事で焼け出されたりと次々に災難が降りかかるような展開では、どうしても噺の運びが重苦しくなってしまう。演者の力量が大いに試されるであろう。「鹿政談」でも同様に奉行の威厳が噺の成否を分ける。裁きものに共通するのは、最後に名奉行が善人の側に立った結末に導くという点である。

動物を扱った演題も、日常から離れるという意味合いでこちらに分類する。以下の十編である。身近な動物である猫が登場する「猫の忠信」や「仔猫」などは、それぞれ芝居噺と怪談に分類している。

(28) 【考えオチ】七編 鴻池の犬、馬の田楽、動物園、まめた、犬の目、牛ほめ、権兵衛狸

【地口オチ】三編 べかこ、法華坊主、元犬

登場する動物は犬が三編、狸と鶏が各二編、牛・馬・虎が各一編という内訳である。虎以外は身近な動物であったと言えよう。明治期以後に創作されたのは「動物園」「まめた」「犬の目」「権兵衛狸」と考えられる。

先に断ったように「講釈」ネタというのは講談から移した演題であり、「くっしゃみ講釈」における「難波戦記」のように講釈をそのまま噺中で語るものではない。また「碁盤載（柳田格之進）」のように他の範疇に分類した講釈ネタもある。以下の十二編である。

(29) 《講釈》十二編

【考えオチ】(2) 太閤と曾呂利、ねずみ

【地口オチ】(5) 太田道灌、太閤の猿、神崎与五郎外伝、掛川の宿、竹の水仙

【オチなし】(5) 袈裟御前、西行鼓ヶ滝、鱧谷、木津の勘助、源平盛衰記

本来の講談には落語のようにサゲはないことから、オチなしの五編はそれを踏襲していると言える。逆に言うと考えオチにしても地口オチにしても、サゲは落語に移す際に作ったと言えよう。例えば赤穂浪士四十七士の一人である神崎与五郎に題材を採った「外伝」では、舞台にした赤穂の汐入村にかけて「辛いはずでございます、汐入村の出でございます」とさげている。

小咄という部類もまた、便宜的にここで採り上げる。演題一覧には、米朝師や露の五郎兵衛師というように演者で見出しをつけて小咄集としているものと、独立して題名を付けられた小咄とが混在している。ここでは後者に分類した九編のみ、分析の対象とする。

(30) 《小咄》九編

【考えオチ】(5) 雷の禪、廻り猫、恵比寿小判、松山鏡、勘定板

【地口オチ】(4) たけのこ、鏡屋女房、穴門の西瓜売り、天神橋

興津(2004)で落語の歴史が簡潔に纏められているように、『醒睡笑』などに収録されている小咄が歴代の名人上手によって長編の落とし話になったという経緯からして小咄は落語の粋である。(30)に挙げられている小咄は一つ一つが独立しており、程々の長さはある。従って本編のマクラとして振るには、少し長すぎると言えよう。小咄は定義上、オチがないというのは許されない。必ずサゲが付いている。この点は講釈ネタと対照的である。一つだけ、粗筋を紹介しておく。「廻り猫」は「廻りオチ」の説明にも用いられる趣向である。拾ってきた猫の名を付けるのに「ああでもない、こうでもない」と吟味した挙げ句に、「お前の名は「ねこ」じゃ」とさげる。思考は往々にして堂々巡りするものだ、という「教訓」を与えているかのような作りである。

3. まとめ

ここまで本論では、上方落語演題の意味的分析を試みてきた。本節は、これまでの纏めと共に今後の課題についても言及する。

上方落語演題の分類として芝居噺・人情噺・怪談・滑稽噺という四区分を踏襲しながら、新しい定義を試みた。特に眼目としたのは、滑稽噺の下位区分であった。商都であるという歴史的背景を反映して、商いについての演題が五十二編と芝居噺や人情噺よりも多い部類であった。対照的に武士が登場する噺は、裁きもの七編を含めても十五編と極端に少なかった。これも上述のような歴史的背景の影響であろう。

滑稽噺は、まず便宜的に「日常と非日常」という基準で二分割を試みた。結果は、前者が百六十五編に対して後者が百七十一編とちょうど半数ずつに別れた。落語は文楽や歌舞伎と異なり、日常生活のありふれた側面を面白可笑しく切り取るのが最大の特徴であると考えられる。そういう点から、全体の約半数が商いや長屋ネタなどの日常的な演題で構成されているという事実を確認することが出来たのは収穫であった。

滑稽噺の下位区分は、どのような演題が好まれ、現代にまで伝えられて残ってきたかという側面も反映していると考えられる。下位区分十九のうち、多いものから順に並べてみる。

(31) 商い 52、長屋 35、旅 30、色恋 30、酒 20、病 20、茶屋 19

印象として(31)に出現している範疇は、実際に高座で口演される演題の数に比例しているのではないと思われる。この七区分だけで百九十六演題と、全体の45%を占めるのである。思いつくままに各区分から一つずつ演題を挙げてみると、「百年目」(商い)「延陽伯」(長屋)「三十石」(旅)「立切れ線香」(色恋)「らくだ」(酒)「夏の医者」(病)「菊江仏壇」(茶屋)というように上方落語を代表する演題が並ぶ。このように、滑稽噺を下位区分することによって上方落語全体の特徴が浮かび上がってきたと言えよう。

本来ならば演題の分類だけに留まらず、サゲの種類と語り口について分析を加えるべきであった。「語り口」というのは登場人物の一人がオチを付けるか、地語りによってサゲられるかという区別を指す。角岡(2011)では、落語本編と小咄をそれぞれ、地口か考えオチか、サゲを登場人物が語るか演者(噺家)が地で語るかによって四分類した。しかし本稿では紙幅が尽きてしまったので、全体の集計だけを次に掲げておく。

(32) 考えオチ 241 仕草オチ 6 地口オチ 145 オチなし 41

人情噺や怪談ものなどでオチがないというのが全体の一割強、地口オチが約三割で考えオチが半数強という比率であった。地口は「誰でも思いつきやすい、単純な言葉遊び」として、考えオチよりも一段低く見られているというような事情が潜んでいるかもしれない。人情噺では十一編中の四編がオチなしと、他の部類に比べても比率が高い。ところが芝居噺では二十五編中の一編、怪談ものでは六十一編中の四編と全体平均よりも少ない。

上方落語と江戸落語では、成立起源に起因する演じ方の差がある。即ち上方は大道芸が起源である故に見台と膝隠しを前に置き、張り扇(これを「たたき」と称する)と小拍子を交互に鳴らして通行人の注意を惹き付ける。また噺に囃子を織り交ぜて、賑やかに盛り上げる(これを「ハメモノ」と称する)。演題としては、笑いを取る滑稽噺が多くなる。対して江戸は、座敷でゆっくりと語る様式に落ち着くのが早かったために「粋」を追求する。それとは別に廓噺が多いというのも江戸落語の一大特徴であるが、ここでは詳細に論じない。上方と江戸ネタの違いについては、別の機会に譲る。

註

※本研究所は、2011～2013年度科学研究費助成事業の助成を受けています。課題番号23652103、課題名「落語の談話構造的研究：「間」と「音調」

¹ 米朝師(2003:108)は「怪談噺」と称し、「、、、というのは重ね言葉でおかしいわけですが、寄席の方では昔から、音曲噺、芝居噺、おとし噺等と称するので、つい怪談噺と言ってしまったのだらうと思います」と説明を加えている。本論では、単に「怪談」と称する。

² 原著ではこの二分類はA、Bという表記であったが、ここでは甲類、乙類と称する。

³ 「蛸芝居」は、魚屋の置いて行った蛸が商家の台所から脱走を企てるという奇想天外な筋立てである。この商家が主人から丁稚に至るまで芝居好きという設定になっており、全編が

芝居仕立てになるよう工夫されている。見せ場では、蛸が墨を吐いて舞台が暗転するという凝りようである。

- ⁴ 文楽と歌舞伎の起源を考察すると、文楽が歌舞伎の演目を供給していると言えるであろう。これは、文楽と歌舞伎に共通する人気三大狂言「菅原伝授手習鑑」「義経千本桜」「仮名手本忠臣蔵」が全て文楽が元になっていることから明らかである。歌舞伎では、これら文楽ネタは「義太夫狂言」と称される。即ち、文楽と同様に太夫が三味線の伴奏で義太夫節を語るのである。
- ⁵ 米朝師（1978：83～94）は「瓢箪場」を、高座で上演されるそのままに採録している。ここでは「本名題は何というのか、まるで判らない」という前置きであったが、『続・上方落語ノート』141～142ページで奈河七五三助作・寛政四年初演の「旧礎花大樹」が原典と判明した旨が報告されている。
- ⁶ このサゲは「五光」と「後光」をかけた地口である。
- ⁷ 歌舞伎「籠釣瓶花街酔醒」からの翻案も「市川堤」に移したというのも、インターネット「上方落語メモ」の解説による。
- ⁸ 「青田」とは芝居小屋の用語で「木戸銭を払わずに見物する客」を指す。この意味と、蝗が棲息する青田をかけているので、演題は地口オチと分類した。
- ⁹ 文楽「義経千本桜」では「大物浦の段」で、平知盛が義経と争う。ここでは知盛が主役であり、弁慶は全く目立たない。能「船弁慶」で弁慶が主君義経を守るために大奮闘するのと対照的である。落語「舟弁慶」は能を下敷きにして、弁慶と知盛が掛け合いをするという趣向になっている。ここでは便宜的に、「舟弁慶」を「義経千本桜」関連の演題と分類しておく。
- ¹⁰ 遊郭は現行法の下では禁制の存在である。しかし「古典落語」の世界にあっては、合法的であった。ここで採り上げるに際しては現行法制の趣旨は尊重しながら、歴史的な観点から分類を行うものとする。

参考文献

- Kadooka, Ken-Ichi. (2009) "Punch Line Paratone: A Special Use of Discourse Intonation." *The Ryukoku Journal of Humanities and Sciences* Vol. 31, No. 1. pp. 203-220.
- Kadooka, Ken-Ichi. (2011) "An Acoustic Analysis of the Punch Line Paratone in English Jokes." *The Ryukoku Journal of Humanities and Sciences* Vol. 33, No. 1. pp. 1 - 13.
- Kadooka, Ken-Ichi. (2012) "An Acoustic Analysis of the Punch Line Paratone in the Japanese *Kobanashi Stories*." *The Ryukoku Journal of Humanities and Sciences* Vol. 33, No. 2. pp. 17 - 37.

興津要（2004）『落語』東京：講談社。

桂米朝（1978）『上方落語ノート』東京：青蛙房。

桂米朝（1985）『続・上方落語ノート』東京：青蛙房。

桂米朝（1991）『三集・上方落語ノート』東京：青蛙房。

桂米朝（2002）『上方落語 桂米朝コレクション 三、愛憎模様』東京：筑摩書房。

- 桂米朝 (2003) 『上方落語 桂米朝コレクション 五、怪異靈験』 東京：筑摩書房。
- 桂米朝 (2005) 『落語と私』 東京：ポプラ社。
- 角岡賢一 (2011) 「落語の談話的構造」『龍谷大学国際センター研究年報』 第二十号、47-60ページ。
- 角岡賢一 (2012) 「日本語小咄の音響分析」『龍谷大学国際センター研究年報』 第二十一号、33-50ページ。
- 郡史郎 (2011) 「イントネーション」城生佰太郎、福森貴弘、斉藤純男 (編著) 『音声学基本辞典』 東京：勉誠出版。
- 釈徹宗 (2010) 『おてらくご 落語の中の浄土真宗』 京都：本願寺出版社。
- 前田勇 (1966) 『上方落語の歴史 (改訂増補版)』 大坂：杉本書店。
- 武藤禎夫 (2007) 『定本 落語三百題』 東京：岩波。